

# Newsletter

Vol.09

2026年3月



チーム医療のグループワーク

## 2期生の卒業にあたって

保健科学部長 五百川 和明



春の訪れとともに、福島県立医科大学保健科学部では2期生が卒業の時期を迎えます。社会は急速な変化の中にあり、先行きへの不安を感じやすい時代ではありますが、こうした状況だからこそ、人々の健康と暮らしを支える医療・保健分野への期待とニーズは一層高まっています。

今年度、本学部では教育・研究・地域活動などの各場面において、社会の変化を見据えた取り組みを進めてまいりました。医療のフィールドは病院内にとどまらず、地域や生活の場、予防や健康づくりなどへと広がっており、学生たちは講義や実習、地域での活動を通して、こうした現状を実践的に学んできました。

本学部は専門的な知識や技術の修得に加え、社会の変化を自分自身の課題として捉え、一人ひとりが主体的に考え、行動できる力を育むことを大切にしています。卒業生には、この春からそれぞれの立場で、人に寄り添い、地域や社会に貢献できる医療人として、力強く、そして自分らしく歩いていくことを期待しています。

これまで学生を温かく支えてこられた保護者の皆様、実習などを通じてご指導いただいた病院・施設の皆様、そして本学部の活動を見守ってくださった地域・市民の皆様にご心より感謝申し上げます。今後とも保健科学部へのご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

### 保健科学部 の 特色

#### 教育環境

- 各分野に精通した経験豊富な教員を全国から招へい(67名)
- 医療機関等で実際に使われている高度な実習機器を導入

#### カリキュラム

- 県内唯一の特定機能病院である附属病院などにおいて、充実した臨床実習を実施
- 医学部・看護学部の教員も一部の授業を担当。より専門性の高い教育を受けられる体制
- 医学部・看護学部の学生との合同授業により、チーム医療を実践的に学べる
- 福島県の地域医療や災害医療を学べる

# TOPICS

## IAEA(国際原子力機関)による特別講義

(令和7年12月11日)

福島駅前キャンパス1F多目的ホールにて、保健科学部1年生および保健科学研究科修士課程学生を対象としたIAEA職員による特別講義が開催されました。内容は「東京電力(TEPCO)第一原子力発電所事故後の復興に向けた福島県とIAEAの協力」「放射線、モニタリング及び測定的基础」「放射性セシウム:福島県の陸上及び水域環境における挙動と環境回復」「放射性廃棄物管理」と90分にわたる日本語同時通訳を介した講義が行われ、教職員含め200名近くが受講しました。9名の学部生と1名の大学院生が積極的に質疑応答を行って知見を広めるなど、参加者にとって貴重な経験となり、これからの学びへの大きな糧となりました。



IAEA特別講義の様子(駅前キャンパス1F多目的ホール)



講義後の質疑応答

## FMUカフェ

(令和7年12月16日)

令和7年度FMU保健科学部カフェがダイバーシティ推進室主催、光が丘協議会共催で開催されました。今年度で開設5年目となる保健科学部では、互いを知り・認め合う機会が必要と考え、昨年度に続きFMUカフェをその機会として位置付け開催しております。今年度は、保健科学部第2期生である4年生に「内定への道:4年生が語る就職活動リアルストーリー」というテーマで、就職先が決まるまでの経緯やタイムスケジュール、就職が決まった時の気持ちなどを発表してもらいました。当日は70名を超える学生や教員が集まる中、理学療法学科の和知 柊斗さん、作業療法学科の笹川 亮さん、診療放射線科学科の佐藤 凛太郎さん、臨床検査学科の舟田 理奈さんがそれぞれの体験談を話し、参加した学生は興味深く聞いていました。会場は終始にぎやかな雰囲気であり、学生にとって就職活動やキャリア形成を考える良い機会となりました。



## 前期GPA※表彰式

(令和7年10月16日)

令和7年度前期の成績に基づいて、各学科の学年1位を修めた学生が表彰され、賞状および副賞が授与されました。

### 5期生

理学療法学科 安孫子 心暖  
作業療法学科 阿部 亨南  
診療放射線科学科 村上 万桜  
臨床検査学科 加勢 明愛  
深瀬 唯  
山形 遥



### 4期生

理学療法学科 秀間 萌葉  
作業療法学科 亀田 初菜子  
診療放射線科学科 古内 涼々香  
臨床検査学科 斎田 あず



### 3期生

理学療法学科 青木 祐大  
作業療法学科 大山 柊  
診療放射線科学科 遠藤 毅人  
鈴木 美柊  
臨床検査学科 矢澤 由羅



※GPA(Grade Point Average):  
科目ごとの成績をポイントに換算し、  
さらに単位数に応じて加重平均した  
もの

# EVENT

## 専門医療技術職体験会

(令和7年11月8日)

福島県教育委員会と本学の広報コミュニケーション室共催による「専門医療技術職体験会」が開催されました。本体験会は「県立高等学校普通科における特色あるコース制」の「保健・医療コース」導入校を対象としたイベントであり、高校生44名とその保護者が参加しました。

当日は理学療法学、作業療法学、診療放射線科学、臨床検査学の4つの分野に分かれ、保健科学部の教員と学部生が参加者をサポートし、実習に使用する器具や高度な医療機器を用いた体験を行いました。



## 令和7年度「合同施設説明会」

(令和7年12月20日)

昨年度に引き続き、保健科学部進路支援部会主催で「合同施設説明会」を開催しました。

当日は、県内の医療機関等24団体(施設)にご協力いただき、保健科学部1年生から3年生向けに各施設の特徴や採用スケジュール等をご説明いただきました。

参加した保健科学部生(140名超)は、今後の就職活動に向けて熱心に説明を聞く姿が見られました。



## 健活フェスタ

(令和7年11月1日)

福島駅前キャンパスのエントランスホールで開催された「体験しよう!楽しく健活フェスタ」に理学療法学科、作業療法学科の教員・学生が出展しました。参加者に健康につながる活動を実際に体験してもらうことで、健康への意識高揚につなげることが

できました。保健科学部はこうした地域での健康増進イベントにも積極的に関わってまいります。



## 大学見学

保健科学部では夏季休業期間に大学見学の受け入れを行っています。

今年度は5校(日本大学東北高等学校、福島成蹊中学校、聖光学院高等学校、会津学鳳中学校、日立北高等学校)の見学を受け入れ

ました。見学では、学科の説明や施設見学に加え、在学生による卒業研究の紹介等を行いました。

この体験を通じて、参加された生徒の皆さんが医療に興味を持ち、将来医療従事者を目指してくれることを期待しています。



# 理学療法学科

Department of Physical Therapy

## 新着任教員紹介



助教 飯田 尚哉

北海道出身です。これまで函館、札幌で臨床経験を積み、その後アメリカ留学、近畿大学での教員経験を経て昨年10月に本学に着任しました。北海道に似た穏やかな福島の雰囲気が入っています。専門は運動器障害・スポーツ理学療法で、臨床に還元可能な基礎研究に取り組んでいます。

## 研究活動紹介

学内講師 高橋 恵里

リハビリテーションのうち、子どもを対象とするサービスは決して多くなく、小児分野を専門とする理学療法士も全体の1%未満と少ないのが現状です。一方、障がいや病気のある子どもには成長に応じた専門的支援が不可欠です。

子どもを対象とした理学療法を提供できる施設は、総合療育センターのような専門施設や総合病院だけでなく、訪問リハビリテーションや児童発達支援・放課後等デイサービスなどにも拡大されてきました。福島県でもサービスを提供できる施設が増えてきています。その実態を可視化するため、県内全施設に調査を実施し「福島県子どもリハビリテーションマップ」を作成することにしました。調査結果は今年度末に公開予定で、子どもと家族、専門職をつなぐことを目指しています。



## 学びの成果

### 学会発表

4年生の卒業研究発表が、学会の優秀演題(発表演題中上位5つ)に選ばれました。

羽生田 乃愛さん:第10回日本心臓リハビリテーション学会東北支部会(11月30日開催)。テーマ「地域在住高齢者における呼吸筋力とフレイルおよび生活機能との関係」

星 大夢さん:第12回日本予防理学療法学会学術大会(12月8-9日開催)。テーマ「地域在住高齢者における1年後のフレイル発生と生活機能の変化との関連性」

さらに、星さんは、最優秀賞に次ぐ優秀賞として表彰されました。



優秀演題セッション口演中の羽生田さん



表彰状を受け取る星さん



マップのイメージ(これはイメージで、実際の情報ではありません)

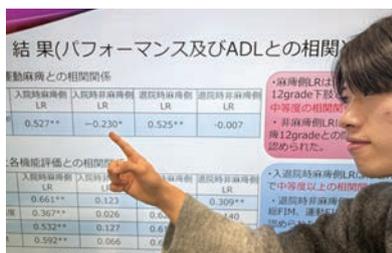
## 卒業研究発表会

(令和7年12月16・17日)

脳卒中患者における麻痺側下肢の支持性低下を反映する荷重率に着目し、その低下に関与する要因を検討した。荷重率は運動麻痺や感覚障害、バランス能力と強く関連し、荷重量の調整には運動・感覚・視空間認知機能が複合的に関与することが示唆された。

本研究を通して、基本動作の背景には多様な要因が関わることを学び、今後は臨床で使いやすい指標をもとに、評価と治療を結びつけた理学療法を実践したい。

(井上 善之亮)



脳卒中後の運動麻痺の重症度と関連する脳領域を明らかにすることを目的に、SVR-LSM解析を行った。上田の12段階片麻痺機能テストで評価した135例を対象に検討した結果、皮質脊髄路、被殻、島皮質、上縦束、視床などが関連領域として同定された。

本研究を通して、運動麻痺の重症化の背景には複数の脳領域やネットワークが関与していることを学んだ。今後の臨床において患者の状態を理解する際の情報として活かしたい。

(高久 響生)



# 作業療法学科

Department of Occupational Therapy

## 研究活動紹介

### — 学校と作業療法 —

教授 倉澤 茂樹

作業療法は、人々の健康を促進するために、「できるようになりたいこと」「できることが期待されていること」といった、意味のある作業への**参加を支援する**専門職です。

私は発達障害領域の作業療法士です。子どもにとって、学校生活への参加は非常に重要です。米国では、作業療法士のおよそ25%が学校作業療法(就学前教育を含む)に携わっていま

すが、日本ではその割合は1%未満にとどまっています。

私の夢は、日本において学校作業療法士が制度として確立されることです。小・中・高等学校に作業療法士が参画することの有用性について研究を進めています。



## 学びの様子

### 学科説明会「インクルーシブメイカソン」

(令和7年9月6・7日)

「生活の困りごとに挑む!作業療法×モノづくりのチカラ」をテーマに学科説明会を開催しました。障がい当事者(ニードノウア:ニードを知る人)、高校生、作業療法士、大学生、企業エンジニアなど総勢90名が参加し、障がい当事者の方々の生活上の課題を解決する自助具を共創するワークショップを実施しました。2日間、多職種・多世代混合チームで協働し、最終日には各班が製作した自助具の発表を行い、参加者全員で共有しました。製作した自助具と3Dデータはオープンソースとしてウェブ上で公開し、同じ困難を抱える方々に届くようにしました。作業療法の専門性を活かした地域連携を基盤とする「地域共創」の実践の場となりました。



### ふくしまH@(はあと)ねっと共生展

(令和7年11月15日)

福島駅東口駅前広場で開催された「ふくしまH@(はあと)ねっと共生展」に、作業療法学科の1年生6名と教員3名がブースを出展しました。

犯罪からの立ち直りや障がいのある方の生きづらさを包み込むというイベント目的に沿い、地域作業療法実習を中心とした学科の地域貢献を紹介するポスターの掲示や、3Dプリンターで作成した自助具の展示を行いました。あわせてポッチャ体験コーナーを設け、多くの方にご参加いただきました。学生たちは地域住民との交流を通じて、作業療法の考えや取り組みを広報し、イベントのテーマである共生社会の理解促進に貢献しました。



## 学会参加報告

### — 学生が優秀演題賞を受賞しました —

私は卒業研究のテーマである「大腿骨近位部骨折患者の入浴自立を予測する栄養指標の特定とカットオフ値の算出」を第36回福島県作業療法学会で発表しました。研究を行うのは初めてであり、また学会発表も漠然と難しそうだと感じていましたが、担当教員にご指導いただき本番は緊張しながらも自信をもって発表に臨むことができました。卒業後もこの経験を活かして研究を継続し、根拠に基づく作業療法の実践に貢献したいと考えています。(4年 渡邊 沙耶)



## 卒業研究発表会 (令和7年11月28日)

作業療法学科4年生による卒業研究成果報告会を開催しました。卒業研究は4年次の必修科目ですが、学生は3年次からゼミに所属し、教員の指導のもと計画的に研究を進めてきました。当日は、これまで積み重ねてきた研究の集大成として、研究内容をポスター形式で発表し、聴講者との質疑・討論にも自信をもって対応する姿が見られました。報告会には1~3年生も参加し、先輩の研究成果に触れる貴重な学びの場となりました。教員一同にとっても、学生の成長を実感できる感慨深い報告会でした。



# 診療放射線科学科

Department of Radiological Sciences

## 新着任教員紹介

助教 岩永 崇

佐賀県出身で鹿児島県から引っ越してきました。これまで約20年間、大学病院を中心に診療放射線技師として勤務し、主にMRIの臨床・研究に携わってきました。臨床で培った視点を教育に還元し、学生の皆さんが現場で必要となる基礎力と考え方を身につけられるよう、教育・研究の両面から成長を支えてまいります。車が好きで、趣味はF1観戦です。休日には福島各地を少しずつドライブし、新しい景色や発見を楽しみたいです。



## 学びの様子

### 工場見学を通して医療を支える技術を学ぶ

(令和7年9月15・16日)

3年生が1泊2日の合宿形式の研修に参加しました。初日は卒業研究に向けた説明や意見交換を行い、学生同士や教員との交流を深めました。2日目はキャノンメディカルシステムズ株式会社の那須工場を見学しました。X線CT撮影装置やMR装置のほか、血管撮影装置や放射線治療装置についても紹介を受けました。実際の機器を目の当たりにすることで、座学だけでは学ぶことのできない知識や気づきを通して、理解を深める貴重な経験となりました。



### 加藤杯 (令和7年10月13日)

診療放射線科学科においてソフトボール大会(加藤杯)を開催しました。教員、学部生、大学院生、卒業生など50名以上が参加し、白熱した試合が繰り広げられました。記念すべき第1回大会は、4年生チームが優勝を果たしました。本大会を通じて、学年を越えた学生同士の交流が生まれ、親睦を深める貴重な機会となりました。今後は恒例行事としての継続を目指しています。



### 第1種放射線取扱主任者試験合格

第1種放射線取扱主任者試験に、2年生の17名、3年生の8名(昨年度合格者を含むと3年生は合計22名)、4年生の1名(4年生は合計17名)が合格するという快挙を成し遂げました。この試験は、放射性同位元素等の規制に関する法律に基づく国家資格試験です(本年度の全国合格率は26.8%)。

## 卒業研究成果発表会

(令和7年12月19日)

福島テルサにて「福島県立医科大学保健科学部診療放射線科学科2025年度卒業研究成果発表会」を開催しました。

本発表会は卒業研究の成果を学会と同じ形式で発表するもので、昨年度に続いて2回目の実施でした。配属された研究室で指導を受けながら実施した研究の成果を、学生一人あたり10分で口頭発表と質疑応答を行いました。同級生や大学院生、そして教員からの質問にもしっかりと回答し、とても活発に質疑応答が行われました。皆さん、とても素晴らしい発表でした。また、その発表を科目「診療放射線科学特別演習Ⅰ」として聴講した3年生の皆さんは、1年後の自分を先輩に投影し、どのように研究を進めていかなど色々と考えることができたのではないのでしょうか。

卒業研究の実施を通じて、全ての学生が飛躍的に成長したのを感じました。診療放射線技師として活躍する際に、この経験が活かされることを願っています。(文責:久保 均)



# 臨床検査学科

Department of Clinical Laboratory Sciences

## 研究活動紹介

### — 臨床生理検査学ゼミの活動 — PHYSIOMI SEMINAR

義久教授を中心に循環生理や神経生理の分野で研究活動を行っています。地域の小中学生・高齢者を対象とした健康測定会では他学科の学生・先生方とも一緒に楽しく活動しています。研究成果は大学生のうちから学会や論文で積極的に発表しています。先日、大学院生2名が第24回日本血管血流学会で若手優秀演題賞を受賞しとても嬉しい結果でした。臨床生理に興味のある方お待ちしております！



## 学びの様子

### 細胞検査士養成コース

本学の細胞検査士養成コースは2年目を迎え、これまでに9名が細胞検査士資格認定試験に合格することができました。これも学内外講師の方々のご協力と、4年次の7月から一心不乱に実習に取り組んだ学生の努力あつての結果です(写真)。



私の本コースでの教育方針は、短期間で合格へ導くため合理的で実践的な実習を重点的に行うことです。長きに渡る大学病院病理診断での臨床経験から、より実務的な要素を取り入れ、病理診断の一部を担う「細胞診断」に取り組んでもらいたいと考えています。今後、臨床の場で活躍できる細胞検査士を輩出できるよう、創意工夫し即戦力となる人材育成に努めてまいります。(梅澤 敬)

### 学生実習における大学院生の活躍

令和7年度には大学院修士課程が新設され、大学院生が学部実習の指導補助を担っています。大学院生はそれぞれの専門分野を生かし、実習準備や学部学生への実技指導などに積極的に関わっています。学部学生にとって、大学院生と共に学ぶ環境は、実習内容について気軽に質問しながら理解を深められる場であると同時に、将来の進路や学修の在り方を具体的に考える機会にもなっています。一方、大学院生にとっても後輩を指導する経験は、自身の知識や技術を再確認し、それらを他者に分かりやすく伝える力を養う重要な学修の一環です。教える立場を経験することで専門性がさらに深まり、コミュニケーション能力や指導力の向上にもつながっています。このように、実習では学部学生と大学院生との活発な交流を通じて、双方にとって意義深い学び合いの時間が生まれています。



学生の指導にあたる大学院生 (右から2番目)

## 卒業研究発表会

(令和7年12月10・11日)

臨床検査学科では、2日間にわたり、4年生による「卒業研究発表会」を開催しました。研究テーマは基礎から臨床応用まで多岐にわたり、1課題あたり発表7分、質疑応答3分という限られた時間の中で、学生たちは「いかに分かりやすく伝えるか」を意識して工夫を凝らし、これまでの学修成果を堂々と発表しました。会場では学生同士による活発な質疑応答が交わされ、4年間の成長が随所に感じられる熱気あふれる会となりました。当日は多くの下級生も参加し、満席の会場で先輩の発表に真剣に耳を傾けていました。本発表会は、4年生にとって学修の集大成であると同時に、下級生にとって将来を描く貴重な学びの場となりました。



# 総合科学教育研究センター

Center for Integrated Sciences and Humanities

## 講義の紹介 No.07 言語と社会 (教授 安田 尚子)

私は必修英語を担当しているため、学内では「英語の先生」という印象が強いと思いますが、専門は言語学です。言語学は、私たちが普段何気なく使っている「言葉」を科学的に分析する学問で、歴史や人類学から医療まで、幅広い分野と深く関わっています。医療に近い分野としては神経言語学があり、脳損傷と言語障害の関係などが研究されています。



私が担当する「言語と社会」は、社会言語学の入門科目です。医療系学部でなぜ社会言語学を学ぶのか、不思議に思う人もいるかもしれません。しかし、医療現場では、医療者の一言が患者さんの気持ちや行動に大きな影響を与えます。言い方ひとつで相手を安心させることもあれば、逆に不安や誤解を生んでしまうこともあります。また、チームで働く現場では、言葉の行き違いが大きなミスにつながる可能性もあります。

「言語と社会」では、コミュニケーションと言語について、方言や若者言葉などの身近な例を使って考えていきます。言語の働きを理解することは、医療現場におけるコミュニケーションの在り方を考える機会となるでしょう。

### 保健科学部後援会長 就任のごあいさつ

保健科学部後援会長 松本 善幸

この度、木下 哲一会長の後任として、保健科学部後援会長に就任いたしました。

保健科学部後援会は、令和3年7月に設立され、これまで実習の旅費等の支援や、国家試験受験対策などの教材購入支援、インフルエンザワクチン接種費用の補助などを行ってきました。

今後も学生が夢に向かって学んでいけるように積極的に支援を行ってまいりたいと考えますので、関係の皆様方におかれましては、引き続き後援会活動への御支援、御協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

### 保健科学研究科大学院生の 研究紹介



作業療法学領域 1年  
渡邊 美智子

病院で働く中で、入院のきっかけとなった疾患に加え、心不全や呼吸器疾患など、リハビリテーションの実施に際して注意が必要な併

存疾患を抱える高齢の方が多いと感じました。そこで私は、入院した高齢者が日常生活を自立して送るうえで、どのような併存疾患や症状が影響するのかを研究しています。この研究は、回復の見通しを立て、適切な支援につなげるうえでも重要だと考えています。

### 編集後記

本号を通して、多忙な日々の中にも活気あふれる学生生活の様子を感じていただけましたら幸いです。

4年生は卒業を目前に控え、春の訪れとともに、それぞれが新たな道へと歩みを進めようとしております。入学からの4年間、講義や実習に真摯に取り組む中で遅く成長してきた学生たちの姿を、私たちは大変頼もしく感じております。

今後とも、本学部の学生ならびに卒業生に対し、温かいご支援を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

編集担当 飯島 順子

